

子路曰く、子、三軍を行らば、則ち誰と与にせんと。子曰く、
 暴虎馮河、死して悔無き者は、吾与にせざるなり。必ずや事に
 臨みて懼れ、謀を好みて成さん者なりと。

【大体の意味内容】勇猛な弟子の子路が言った。「先生が三万の大軍を率いて戦うことになつたとしたら、だれとご一緒に指揮を執りますか？」先生はおっしゃった。「虎を素手で殴り殺そうとしたり、大河を歩いて渡るような、やたらと血気盛んで、そうやって死んでも後悔しないと思卷いていながら、結局他人まで危険に巻き込むような者とは、一緒にやらない。いざというときには、他人の生命を預かっているのだというプレッシャーに押しつぶされるほど懼れ慄き、事前によく戦略や戦術を考えて、味方の犠牲を出さないのはもちろん、敵も殺さずに目的を達成するように策を練る者と、一緒にやりたい。（そうやって強い敵を味方にできれば、これほど頼もしいことはないではないか。）」

「最強の敵は最高の友」といいます。これは、手ごわいライバルと切磋琢磨しあうことで、自分自身も成長できるのだから、敵とは実は素晴らしい友人なのだ、という意味もあります。ですが、ただそれだけではなく、じっさいに強力なライバルを味方にできれば、自分たちはどんどん豊かになっていくはず。自分個人をとことん鍛え上げていくことも大事ですが、同時に臆病なほど謙虚になり、全体の幸せを考えるのも必要だということなのでしょう。自分の人生だけでなく、他人の人生についても現実味を感じることが肝要なのです。自分の人生を大事に精いっぱい生きるのは当然ですが、他人、つまり味方や敵の人生も尊重し、誠意を尽くしてこそ、本当の信頼関係も結べるのだと思います。